6.7 [火]

第10回 読響アンサンブル・シリーズ よみうり大手町ホール/19時30分開演(19時から解説)

Yomikyo Ensemble Series, No.10 Tuesday, 7th June, 19:30 (Pre-concert talks from 19:00) / Yomiuri Otemachi Hall

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《鈴木優人指揮の小編成オーケストラ》

指揮・チェンバロ/鈴木優人 Conductor and Harpsichord MASATO SUZUKI

ナビゲーター/鈴木美潮 (読売新聞東京本社 社長直属教育ネットワーク事務局専門委員)

コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

武満徹 地平線のドーリア [約12分]

TORU TAKEMITSU / The Dorian Horizon

C.P.E. バッハ チェンバロ協奏曲 =短調 Wq. 23 [約23分] C.P.E. BACH / Harpsichord Concerto in D minor, Wq. 23

- I . Allegro
- II. Poco andante
- ■. Allegro assai

[休憩 Intermission]

メンデルスゾーン 交響曲 第1番 ハ短調作品11 [約32分] MENDELSSOHN / Symphony No. 1 in C minor, op. 11

- I . Allegro di molto
- II. Andante
- III. Menuetto: Allegro molto
- IV. Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

6.11 _[±]	第89回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール/14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 89 Saturday, 11th June, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall
6.12 [H]	第2回 パルテノン名曲シリーズ パルテノン多摩 大ホール/15時開演 Parthenon Popular Series, No. 2

指揮/オラリー・エルツ Conductor OLARI ELTSP.7
ピアノ/アンナ・フェドロヴァ Piano ANNA FEDOROVAP.9
コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA
グリンカ 歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲 [約5分] P.11 GLINKA / "Ruslan and Lyudmila" Overture
ラフマニノフ ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調作品18 [約33分] P.12 RACHMANINOFF / Piano Concerto No. 2 in C minor, op. 18 I. Moderato II. Adagio sostenuto III. Allegro scherzando
[休憩 Intermission]
ムソルグスキー (ラヴェル編) 組曲 〈展覧会の絵〉 [約35分] P.13 MUSSORGSKY (arr. RAVEL) / Pictures at an Exhibition プロムナード — I. グノームス (こびと) — プロムナード Ⅱ. 古城 — プロムナード Ⅲ. テュイルリー (遊びの後の子供たちの喧嘩) Ⅳ. ビドロ (牛車) — プロムナード
V. 殻をつけた雛鳥のバレエ

Ⅲ. カタコンブ(古代ローマの地下墓地) ― 死せる言葉による死者への呼びかけ

Ⅵ. サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ(金持ちのユダヤ人と貧しいユダヤ人)

- Ⅳ. 鶏の足の上の小屋(バーバ・ヤガー=民話上の妖婆)
- X. キエフの大門

Ⅷ. リモージュ(市場)

- [主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 (6/11) 多摩市文化振興財団、読売日本交響楽団、読売新聞社 (6/12)
- [助成] ※字成28年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業(6/12)
- [協力] 横浜みなとみらいホール (6/11)

第188回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール/14時開演
Saturday Matinée Series, No. 188
Saturday, 18th June, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

第188回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール/14時開演
Sunday Matinée Series, No. 188
Sunday, 19th June, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮/シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)
Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P.8

ピアノ/ハヴィエル・ペリアネス Piano JAVIER PERIANES P.9

コンサートマスター/小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ストラヴィンスキー 管弦楽のための4つの練習曲 [約10分] P.14

STRAVINSKY / Four Etudes for Orchestra
I. ダンス II. エキセントリック III. カンティーク IV. マドリード

ベートーヴェン ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調作品73〈皇帝〉[約38分] P.15

BEETHOVEN / Piano Concerto No. 5 in E flat major, op. 73 "Emperor"
I. Allegro
II. Adagio un poco mosso

[休憩 Intermission]

II. Rondo: Allegro

ベートーヴェンバレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉から

序曲、第5曲"アダージョ"、第16曲"フィナーレ" [約18分] ……

P.16

 $BEETHOVEN \,/\, Excerpts \; from \; "Die \; Gesch\"{o}pfe \; des \; Prometheus"$

Overture, No. 5 Adagio, No. 16 Finale

ストラヴィンスキー **バレエ組曲〈火の鳥〉**(1919年版) [約23分] …… P.17 STRAVINSKY / Firebird Suite (1919 version)

Ⅰ. 序奏 Ⅱ. 火の鳥の踊り Ⅲ. 火の鳥のヴァリアシオン

Ⅳ. 王女たちのロンド V. 魔王カスチェイの凶悪な踊り

Ⅵ. 子守唄 Ⅵ. 終曲

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 [助成] ・文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業) [事業提携] 東京芸術劇場 6.24 [金]

第559回 定期演奏会 サントリーホール/19時開演

Subscription Concert, No. 559 Friday, 24th June, 19:00 / Suntory Hall

/2.3 ユニン、エンノデカニンノ(単ケ単原サ

1百1年 / ンルリアン・カンノルブン (帯仕指揮者) Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P.8
チェロ/ジャン=ギアン・ケラス Cello JEAN-GUIHEN QUEYRAS
コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA
ベルリオーズ 序曲〈宗教裁判官〉 作品3 [約13分]
デュティユー チェロ協奏曲〈遥かなる遠い世界〉[約30分] P.19 DUTILLEUX / Cello Concerto "Tout un monde lointain"
」. 謎
Ⅱ.眼差し
II. うねり
IV. 鏡

[休憩 Intermission]

V. 賛歌

ブルックナー 交響曲 第3番 ニ短調 〈ワーグナー〉(第3稿) [約57分] …… P.20 BRUCKNER / Symphony No. 3 in D minor "Wagner" (3rd version)

I . Mehr langsam, Misterioso

II. Adagio. Bewegt, quasi andante

■. Scherzo : Ziemlich schnell

IV. Finale: Allegro

※当初「第2稿」と一部発表しましたが、「第3稿」に変更となりました。お詫び申し上げます。

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 [助成] ・文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) [協力] アフラック(アメリカンファミリー生命保険会社) 〈サントリーホール30周年記念参加公演〉



第593回 名曲シリーズ 6.29サントリーホール/19時開演 Popular Series, No. 593 Wednesday, 29th June, 19:00 / Suntory Hall 非破壞検査 Presents 第14回 大阪定期演奏会 6.30 [*] フェスティバルホール/19時開演 Subscription Concert in Osaka No. 14, presented by Non-Destructive Inspection

Co., Ltd Thursday, 30th June, 19:00 / Festival Hall

指揮/シルヴァン・カンブルラン(常任指揮者) Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P. 8 ピアノ/小菅 優 Piano YU KOSUGE P.10 コンサートマスター/小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

リストピアノ協奏曲第2番 イ長調「約21分」

LISZT / Piano Concerto No. 2 in A major

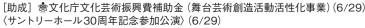
- I. Adagio sostenuto assai II. Allegro agitato assai
- III. Allegro moderato IV. Allegro deciso
- V. Marziale un poco meno allegro VI. Allegro animato

「休憩 Intermission]

MAHLER / Symphony No. 5 in C sharp minor

- I. Trauermarsch
- II. Stürmisch bewegt, mit größter Vehemenz
- III. Scherzo
- IV. Adagietto
- V. Rondo Finale

「主催」読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 [特別協賛] 北非破壊検查株式会社(6/30)





オラリー・ エルツ

Olari Elts

エストニア出身の実力派 読響には2度目の登場

室内アンサンブルからオペラ まで幅広く活躍し、ユニークな プログラムで国際的な評価を得 ている指揮者。今回の来日では、 ラフマニノフのピアノ協奏曲第 2番とムソルグスキー 〈展覧会の 絵〉というロシアものの定番を

振る。新鮮な音楽を聴かせてくれるだ ろう。

1971年エストニアの首都タリン生ま れ。2000年にシベリウス国際指揮者コ ンクールで優勝して注目され、翌年にラ トヴィア国立響の首席指揮者として国際 的なキャリアをスタートさせた。ブルタ ーニュ管、スコットランド室内管、ヘル シンキ・フィルの首席客演指揮者を経て、 現在は母国エストニア国立響の首席客 演指揮者を務める。また、これまでにウ ィーン響、バーミンガム市響、北ドイツ 放送響、デンマーク国立放送響、フィ ンランド放送響、リヨン国立管などに客



演している。

現代作品やバルト3国出身の作曲家 を積極的に取り上げる一方、近年では オペラでも成果を収めており、ノルウェ ーでチャイコフスキー〈エフゲニー・オネ ーギン〉、フランスでベルリオーズ〈ファ ウストの劫罰〉を上演したほか、エスト ニア国立歌劇場でモーツァルト〈ドン・ ジョヴァンニ〉〈イドメネオ〉、プッチーニ の3部作、ブリテン〈アルバート・ヘリン グ〉などを手がけている。

読響への客演は2回目となる。

◇6月11日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ ◇6月12日 パルテノン名曲シリーズ

シルヴァン・カンブルラン

(常任指揮者) Sylvain Cambreling

就任7年目のマエストロますます息合う演奏に

就任から7シーズン目を迎え、 読響との関係がますます親密さ を増している常任指揮者。今回 はストラヴィンスキー、ブルック ナー、マーラーという多彩なプロ グラムで読響と息の合った演奏 を聴かせてくれるだろう。技巧

派の俊英ケラスと共演するデュティユー のチェロ協奏曲にも注目したい。

1948年フランス・アミアン生まれ。これまでにブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場の音楽監督、フランクフルト歌劇場の音楽総監督、バーデンバーデン&フライブルクSWR(南西ドイツ放送)響の首席指揮者を歴任し、現在はシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督とクラングフォーラム・ウィーンの首席客演指揮者を兼任する。また、巨匠セルジュ・チェリビダッケの後任として、ドイツ・マインツのヨハネス・グーテンベルク大学で指揮科の招聘教授も務める。



客演指揮者としてはウィーン・フィル、ベルリン・フィルを始めとする欧米の一流楽団と共演しており、オペラ指揮者としてもザルツブルク音楽祭、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座などに数多く出演している。

録音にも積極的で、読響とは《幻想交響曲ほか》《ペトルーシュカほか》 《第九》《春の祭典/中国の不思議な役人》《スコットランドほか》をリリースしている。

> ◇ 6月18日 土曜マチネーシリーズ ◇ 6月19日 日曜マチネーシリーズ ◇ 6月24日 定期演奏会 ◇ 6月29日 名曲シリーズ ◇ 6月30日 大阪定期演奏会



ピアノアンナ・フェドロヴァ

Piano Anna Fedorova

1990年ウクライナ生まれの新鋭ピアニスト。その「心地よい上品さと野性的な表現」は批評家から称賛されている。キエフ音楽院、ロンドン王立音楽院、イモラ国際アカデミーで学び、2009年にルービンシュタイン記念国際ピアノコンクール(ポーランド)で優勝し、一躍注目を集める存在となった。これまでに北西ドイツ・フィルやネーデルラント・フィル、ローザンヌ室内管などと共演したほか、アムステルダム・コンセルトへボウ、カーネギーホールなど欧米の一流ホールで演奏している。

読響とは初共演となる。

◇ 6月11日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ ◇ 6月12日 パルテノン名曲シリーズ



©Josep Molina

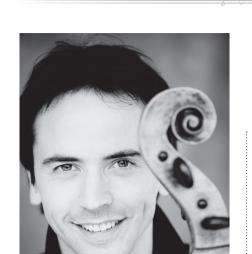
ピアノハヴィエル・ペリアネス

Piano Javier Perianes

スペイン出身のピアニストとして欧米で 注目されている若手。母国での人気は絶 大で、ベートーヴェンやシューベルトなど で高い評価を得ている。2月にはロイヤ ル・コンセルトへボウ管と共演し大成功 を収め、6月末にはウィーン・フィルにも デビューする。1978年アンダルシア地 方のネルヴァ生まれ。バレンボイムに師 事し、これまでにマゼール、メータらと 共演している。また、バレンボイムの指 揮でベートーヴェンのピアノ協奏曲第5 番〈皇帝〉を弾き、大きな注目を浴びた。 読響とは2度目の共演となる。

◇ 6月18日 土曜マチネーシリーズ

◇6月19日 日曜マチネーシリーズ



©Marco Borggreve

チェロジャン=ギアン・ケラス

Cello Jean-Guihen Queyras

世界でも屈指の技巧派チェリスト。バロックから現代曲まで幅広いレパートリーを誇り、協奏曲、室内楽、リサイタルと縦横無尽の活躍ぶりは、常に注目の的となっている。1967年カナダ・モントリオール生まれ。リヨン国立高等音楽院、フライブルク音楽大、ジュリアード音楽院で学び、アンサンブル・アンテルコンタンポランの首席として頭角を現す。ソリストとして著名なホールでリサイタルを開き、世界の一流オーケストラと共演を重ねる。室内楽ではアルカント・カルテットのメンバーとしても活躍。録音は仏ハルモニア・ムンディから多数出ている。

◇6月24日 定期演奏会



©Marco Borggreve

ピアノ小菅優

Piano Yu Kosuge

日本の若手を代表するピアニストとして、ヨーロッパを拠点に国際的に活躍する。東京生まれ。93年に渡欧し、ドイツ、オーストリアで学んだ。ザルツブルク音楽祭、サイトウ・キネン・フェスティバルなど主要音楽祭に出演し、ハノーファー北ドイツ放送フィル、フランス国立放送フィル、サンクトペテルブルク響などと共演を重ねている。室内楽にも積極的に取り組むほか、近年は東京、大阪でベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会を開き好評を博した。同時期に録音した《ベートーヴェン/ピアノ・ソナタ全集》(ソニー)も高い評価を得ている。

◇ 6月29日 名曲シリーズ ◇ 6月30日 大阪定期演奏会



6.11 [±]

6.12 [H]

柴田克彦(しばた かつひこ)・音楽ライター

がリンカ 歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲

作曲: 1842年/初演: 1842年12月9日、ペテルブルク/演奏時間: 約5分

"ロシア国民音楽の父" ミハイル・グリンカ (1804~57) の全作品中、最もポピュラーな1曲。ロシアを代表する管弦楽曲として、コンサートで演奏される機会も多い。

1837~42年に作曲された歌劇〈ルスランとリュドミラ〉(全5幕)は、民話に基づくプーシキンの諷刺詩を原作とした、ロシアの古典的なオペラ。古代ロシアのキエフ公国を舞台に、「悪魔に奪われたスヴェトザール公の娘リュドミラを、3人の騎士=求婚者たちが救出に向かい、リュドミラは救出に成功したルスランと結ばれる」といった楽しいおとぎ話が展開される。

序曲は、終始急速なテンポで運ばれる、活気にあふれた音楽。ソナタ形式で、主題が本編の音楽から採られるな

ど、西欧の伝統的なオペラ序曲と同じ スタイルで書かれている。また本作は、 作曲者も「全速力で疾走するような」演 奏を求めており、弦楽セクションの妙技 と爽快かつ華麗なサウンドを満喫できる。

曲は、プレスト、ニ長調。全合奏に 続いて、弦楽器のめまぐるしい動きを 伴う第1主題(第5幕の婚礼の場の音 楽)が奏され、やがてヴィオラやチェ 口等による流麗で哀愁を帯びた第2主 題(第2幕のルスランのアリア)が登 場。両主題を軸にして軽快に進み、最 後の部分ではファゴットやトロンボー ンによる下降音型(第1幕の悪魔のモ ティーフ)が重なる。この音型は全音 音階(半音のない6音の音階。ドビュ ッシーなどが重用した)の、最初期の 使用例とされている。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ラフマニノフ

ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調作品18

作曲:1900~01年/初演:1901年11月9日、モスクワ/演奏時間:約33分

チャイコフスキーの流れをくむ近代 ロシアの作曲家で、大ピアニストでも あったセルゲイ・ラフマニノフ (1873 ~1943) の代表作のひとつ。彼の4曲 のピアノ協奏曲のみならず、ロシアの 同分野の中でも、チャイコフスキーの 第1番と共に最上位の人気を得ている。

モスクワ音楽院時代から作品が評価 され、前途洋々に思えたラフマニノフ だが、1890年代末期になると、交響 曲第1番の初演失敗や、面会した文豪 トルストイに作品を否定されたこと、 初恋の人の結婚などが重なり、作曲不 能の事態に陥った。しかし、1900年 に精神科医ニコライ・ダーリ博士の暗 示療法を受けて立ち直る。そして、博 士が暗示した「君は協奏曲の作曲を始 め、それは傑作になる」の言葉通り、 夏のイタリア旅行を契機に創作を始 め、翌1901年に完成。同年モスクワに て作曲者の独奏で行われた初演も大成 功を収め、曲はダーリ博士に献呈され た。ただし、最近では博士の治療を過 大評価することへの疑問(=それがな くても完成していたのではないか?) が投げかけられてもいる。

曲は、古典的な3楽章構成をとりながらも、甘美な旋律と叙情味に溢れた音楽が、ダイナミックなピアノと重厚なオーケストラによって連綿と展開される。20世紀初めの作とは思えないほど濃厚なロマンティシズムと、難技巧を伴う近代的なピアニズムが融合した、スケールの大きな作品となっている。中でも、鐘のようなピアノにオーケストラの雄大な主題が重なる第1楽章冒頭は、インパクト絶大。また第2楽章の主要主題や第3楽章の第2主題は名旋律として知られ、ポピュラー音楽にも編曲されている。

第1楽章 モデラート 冒頭の雄大 な第1主題と、ピアノに出されるセン チメンタルな第2主題を軸に、劇的な 展開を遂げる。

第2楽章 アダージョ・ソステヌート 叙情的で甘美きわまりない緩徐楽章。 テンポを速めた中間部では、とりわけ ピアノが活躍する。

第3楽章 アレグロ・スケルツァンド リズミカルな第1主題と優美な第2主 題が対比されながら進み、壮大なクラ イマックスが築かれる。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、シンバル)、弦五部、独奏ピアノ

ムソルグスキー (ラヴェル編)

組曲〈展覧会の絵〉

作曲: 1874年/編曲: 1922年/初演: 1922年10月19日 (ラヴェル編)、パリ/演奏時間: 約35分

ロシアの国民楽派「5人組」の一人、 モデスト・ムソルグスキー (1839~81) は、1874年1月、若くして亡くなった 親友で画家&建築家ヴィクトル・ハル トマンの遺作展を見た。そこで感銘を 受けた彼は、絵の印象に基づく音楽の 創作を決意。同年6月にはピアノ組曲 〈展覧会の絵〉を完成した。だが、生前 には日の目を見ず、没後5年を経た1886 年にようやく出版。そして1922年、近 代フランスの大家モーリス・ラヴェル (1875~1937) による管弦楽版が出さ れ、大人気レパートリーとなった。

曲には、場内の移動を表す"プロムナード"を随時挟んで10枚の絵が登場。「管弦楽の魔術師」ラヴェルの華麗な楽器法の妙を、ムソルグスキーの生き生きした描写と共に楽しむことができる。プロムナード:華やかなトランペットのソロから楽器を増していく。

グノームス: 地底の宝を守るこびとの グロテスクな姿。

プロムナード:最初よりも穏やかに奏される。

古城:イタリアの古い城。サクソフォ

ンがもの哀しい旋律を歌う。

プロムナード:少し重め。

テュイルリー:パリの公園で遊ぶ子供 たちを描いた、めまぐるしい音楽。

ビドロ:ポーランドの牛車の重い足取り。 プロムナード:木管で優しげに奏される。 殻をつけた雛鳥のバレエ:生まれたて の雛鳥のユーモラスな動き。

サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ(金持ちのユダヤ人と貧しいユダヤ人): 尊大な金持ちと、彼にお金を求める貧しい人が、威圧的な旋律と弱音器を付けたトランペットによって対比される。 リモージュ(市場): フランスの市場での、休みないおしゃべり。

カタコンブ(古代ローマの地下墓地): 不気味なハーモニーの後、「死せる言葉による死者への呼びかけ」と題された部分へ移り、プロムナードが変奏される。 鶏の足の上の小屋:鶏の足の上に建った小屋に住んでいるロシア民話の妖婆。叩きつけるような激しい音楽。

キエフの大門: 現ウクライナの首都キエフの荘厳な大門を描いた、壮麗なクライマックス。

楽器編成/フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ3 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ (バリトン)、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、シンバル、トライアングル、サスペンデット・シンバル、小太鼓、ムチ、ラチェット、シロフォン、グロッケンシュピール、銅鑼、チューブラーベル)、ハープ2、チェレスタ、弦五部

6.19 [H]

飯尾洋一(いいおよういち)・音楽ライター

ストラヴィンスキー

管弦楽のための4つの練習曲

作曲:1929年/初演:1930年11月7日、ベルリン/演奏時間:約10分

祖国ロシアを離れ、1914年にスイ ス、1920年にフランスへと居を移し て、新古典主義の作風を確立したイー ゴリ・ストラヴィンスキー(1882~ 1971)。1929年、ストラヴィンスキー はスイス時代の二つの旧作をオーケス トラ用に編曲して、〈管弦楽のための4 つの練習曲〉に仕立てた。第1曲から 第3曲までは、1914年作曲の〈弦楽四 重奏のための3つの小品〉、第4曲は 1917年作曲の〈ピアノラのための練習 曲〉に基づく。ピアノラとはアメリカ のピアノ製作会社エオリアン社が製作 した自動ピアノのこと。20世紀初頭 に大量に販売され、初期の自動ピアノ の代名詞的なヒット商品となった。

第1曲 "ダンス" コン・モート (動きをつけて)。木管楽器のリズミカルで反復的な音型に、弦楽器が鋭く合いの手を入れる。

第2曲 "エキセントリック" モデラ

ート。簡潔な動きのなかにユーモアをにじませて開始される。原曲はロンドンで目にしたコメディアン、リトル・ティック(140cmにも満たない身長で巨大なブーツを履いて踊る芸風によって一世を風靡した)のおどけた仕草にインスピレーションを受けて書かれている。

第3曲 "カンティーク" ラルゴ。ゆったりとした静かな聖歌風の音楽。茫漠として、焦点が定まらない印象を与える。

第4曲 "マドリード" アレグロ・コン・モート。原曲の〈ピアノラのための練習曲〉は、作曲者がスペインを訪れて受けた感銘をもとに書かれたもの。オーケストレーションの際に"マドリード"の題が改めて添えられた。スペイン風の鮮やかさと躍動感に、ストラヴィンスキー流の乾いたリリシズムが融合する。

楽器編成/フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ3 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスクラリネット (エスクラリネット持替)、ファゴット2、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハープ、ピアノ、弦五部

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73〈皇帝〉

作曲: 1809~10年/初演: 1811年11月28日、ライプツィヒ/演奏時間: 約38分

輝かしく堂々たる楽想は、まさに「皇帝」の名にふさわしい。この題は作曲者ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)によるものではなく、出版社が付けたのだが、全曲に溢れる絢爛たるヒロイズムと、随所にちりばめられた戦時を思わす勇壮な楽想を思えば、見事に作品内容を言いあらわしたものといえるだろう。

作曲当時、ウィーンはナポレオン軍の進軍により戦乱に巻き込まれていた。ウィーンを包囲したナポレオン軍はすぐにシェーンブルン宮殿を占拠し、さらにウィーン中心部を砲撃して本格的な戦闘に突入した。ベートーヴェンの住居の近くにも砲弾が落ち、作曲家は地下室へ避難したと伝えられる。

支援者である貴族たちがこぞって疎開してしまい、ウィーンから音楽活動が途絶えてしまうが、苦境のなかでベートーヴェンは創作力を爆発させ、最後のピアノ協奏曲となる第5番〈皇帝〉を書きあげた。

従来のピアノ協奏曲では自らソリス トを務めて初演していたベートーヴェ ンだが、聴覚の衰えもあって、フリー ドリヒ・シュナイダーの独奏によりラ イプツィヒで初演が行われた。

第1楽章 アレグロ 冒頭の総奏に 続いてすぐさま独奏ピアノが登場し、 華麗なパッセージを奏でるのは、当時 の協奏曲としては新機軸。推進力みな ぎる管弦楽の主題が続き、雄大な楽想 が展開される。通常、楽章終盤にはソ リストのための自由なカデンツァが置 かれるが、ここではカデンツァと作品 本体が一体化されており、ソリストに 裁量は与えられていない。

第2楽章 アダージョ・ウン・ポコ・モッソ 瞑想するかのような穏やかな主題が変奏される。弱音器付きの弦楽器が柔らかい響きを作り出す。最後にピアノが終楽章を予告するフレーズを奏でて、切れ目なく終楽章へ突入する。

第3楽章 ロンド: アレグロ 躍動 感あふれる主題で開始され、エネルギッシュに高潮する。ピアノと管弦楽が 掛けあいを繰り返しながら壮麗なフィナーレへと突き進む。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ベートーヴェン

バレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉から "序曲"、第5曲"アダージョ"、第16曲"フィナーレ"

作曲:1800~1801年/初演:1801年3月28日、ウィーン/演奏時間:約18分

ベートーヴェンにとって数少ないバレエ音楽のひとつ、〈プロメテウスの創造物〉が初演されたのは1801年のこと。ベートーヴェンの創作史のなかでは、交響曲第1番と交響曲第2番の間に位置する。

バレエの台本は当時ウィーン宮廷劇場のバレエ・マイスターであったサルヴァトーレ・ヴィガーノによる。作曲家ルイージ・ボッケリーニを叔父に持つ高名な舞踊家であったヴィガーノは、1793年にウィーンでバレエ公演を行い、その後、プラハやヴェネツィアを拠点に活躍した後、1799年にウィーンを再訪して宮廷バレエ・マイスターに就任した。ヴィガーノはギリシャ神話のプロメテウスを題材とした台本を書きあげ、その音楽をベートーヴェンに依頼した。

〈プロメテウスの創造物〉はかなりの成功を収めたといってよいだろう。 1801年の初演から翌年までの間に、ウィーンで20回以上も上演されている。振付けの詳細は失われてしまったが、ヴィガーノの没後に出版された記 録によれば、以下のような筋立てを 持つ。

プロメテウスは泥と水から人形の男女を作り、天上の炎を盗んで命を与えた。人形は動き出すが、その粗野なふるまいにプロメテウスは失望し、人形たちをアポロとミューズの住むパルナッソス山へ連れ出す。神々が人形に音楽や舞踊、悲劇や喜劇を教え、プロメテウスの創造物は完全な人間となった。

ベートーヴェンの音楽は、序曲と「テンペスタ」(嵐)と題された導入の音楽、そして全16曲の場面からなる。現在では序曲のみが演奏されることが多いが、本日は序曲に加え、第5曲 "アダージョ"と第16曲 "フィナーレ"の2曲が抜粋して演奏される。

序曲 荘重な序奏が快活な主部を導く。 第5曲 "アダージョ" ハープの分散 和音で開始され、優美なフルートが 続く。

第16曲 "フィナーレ" 後に交響曲 第3番 〈英雄〉の終楽章に使われる主 題が登場する。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、ハープ、弦 五部

ストラヴィンスキー

バレエ組曲〈火の鳥〉(1919年版)

作曲: 1909~10年、1919年(組曲)/初演: 1910年6月25日、パリ・オペラ座(バレエ)/演奏時間: 約23分

1909年、当時パリを席巻していた ロシア・バレエ団を率いるディアギレ フは、翌年のオペラ座での公演のため に若きストラヴィンスキーに〈火の鳥〉 の作曲を委嘱した。ストラヴィンスキーはまだ20代の新進作曲家にすぎな かったが、ディアギレフは前年に聴い た交響的幻想曲〈花火〉で、この作曲 家の異才を確信していた。

〈火の鳥〉は初演から大きな成功を 収め、ストラヴィンスキーは一躍時の 人となった。コンサートでも上演でき るように、すぐに組曲(1911年版)が 用意されたが、第一次世界大戦による 混乱から、4管編成の大編成で書かれ た〈火の鳥〉の演奏は困難になってし まう。そこで、ストラヴィンスキーは 2管編成用ながら高い演奏効果を持つ 新たな組曲(1919年版)を作りあげた。 後に1945年にも組曲が作られている が、現在最もよく演奏されるのは、こ の1919年版である。

物語はロシア民話に基づく。イワン 王子は伝説の火の鳥を捕らえるが、火 の鳥は「羽根を一枚与えるから逃して ほしい」と嘆願し、王子は火の鳥を逃 す。王子は魔王カスチェイに捕らわれていた王女と恋に落ちる。魔王は魔術で王子を石に変えようとするが、王子は火の鳥の羽根の不思議な力によって魔王を倒す。王子と王女はめでたく結ばれる。

"序奏" うごめくような低弦が不吉 な気配を漂わせる。

"火の鳥の踊り"、"火の鳥のヴァリアシオン" 鋭く切れ込む弦楽器に木管楽器が加わって、鳥の羽ばたきを表現する。リズミカルに跳ね回るようなヴァリアシオンが続く。

"王女たちのロンド"(ホロヴォート) ホルン、フルート、ヴァイオリン・ソロに先導されて、オーボエが甘美な旋律を歌う。

"魔王カスチェイの凶悪な踊り" 最強奏の一撃で開始され、魔王とその手下たちが荒々しく踊る。トロンボーンがグリッサンドで雄たけびを上げる。

"子守歌" ゆったりとした眠りの音楽。

"終曲" のびやかなホルンの主題で始まり、力強く王子と王女の結婚を祝福する。

楽器編成/フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、シロフォン)、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部

6.24 [金]

柴汁純子(しばつじじゅんこ)・音楽評論家

ベルリオーズ 序曲〈宗教裁判官〉作品3

作曲:1826年/初演:1828年5月26日、パリ/演奏時間:約13分

医科大学に入学するためにパリにやってきたエクトル・ベルリオーズ (1803~69) は、音楽への、とりわけオペラへの情熱を捨て去ることができなかった。家族の反対を押し切って、1823年にパリ音楽院に入学し、ル・シュウールに師事した。そのわずか2年後には、未熟な面はあったが、最初の作品となる〈荘厳ミサ曲〉が初演され、次はフランスの作曲家の登竜門「ローマ賞」に挑戦しようと意気込んだ。序曲〈宗教裁判官〉も、この時代に書かれた、作曲家の若き日の作品である。

ベルリオーズは、幼い頃から文学を 好み、青年時代はシェイクスピア劇や ゲーテの『ファウスト』などに傾倒し た。劇的な世界を音楽で表現しようと、 まずは、友人フェランの詩をもとにカ ンタータ〈ギリシア革命の英雄的情景〉 を完成させるが、その音楽が演奏され ることはなかった。そこで、今度は彼 の台本をもとに3幕のオペラ〈宗教裁判官〉を書き始めたものの、全曲を完成させることはできなかった。序曲はそのまま残ったが、いくつかの旋律は〈幻想交響曲〉の第4楽章の主題をはじめ、別の作品へと転用された。

この序曲は、ベルリオーズのまさに 創作の原点といえる作品で、彼らしい ドラマティックな表現と響きの色彩感 が際立つ。後に管弦楽法の大家となる 作曲家の音色や響きの探求は、すでに この頃から始まっていたといえよう。

ゆるやかな導入部 (アダージョ・ソス テヌート) では、弱音で始まる哀しげ な主題が、低音を力強く響かせながら 高まっていく。ソナタ形式の主部 (ア レグロ・アッサイ) は、フーガ風に提 示される第1主題と軽やかな第2主題 が、いずれも弦楽器で示される。オペ ラの一場面を思わせる劇的な表現を含 みながら展開し、華やかに盛り上がる。

楽器編成/フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、コルネット、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、シンバル)、弦五部

デュティユー

チェロ協奏曲〈遥かなる遠い世界〉

作曲: 1967~70年/初演: 1970年7月25日、エクサン・プロヴァンス音楽祭/演奏時間: 約30分

今年生誕100年を迎えたアンリ・デュティユー(1916~2013)は、フランス西部のアンジェに生まれた。パリ音楽院で学び、1938年に「ローマ賞」を受賞。長らくフランス国営放送局の音楽制作部門に勤め、同時代の様々な音楽に触れ、交響曲第1番(1950)で国際的な評価を受けた。多作家ではないが、近代フランス音楽の伝統を受け継ぎながら、独特の透明感がある、洗練された響きの音楽を作り出した。

チェロ協奏曲〈遥かなる遠い世界〉は、ロストロポーヴィチの委嘱で作曲され、1970年にボド指揮のパリ管弦楽団によって初演された。5楽章構成で、第2、第4楽章を緩徐楽章と位置づけ、全体は単一楽章のように切れ目なく演奏される。タイトルの〈遥かなる遠い世界〉は、フランス象徴主義の詩人ボードレールの詩集『悪の華』所収の「髪」という詩から採られた。各楽章のタイトルもボードレールの詩から付され、詩句の引用が楽章の冒頭に記された(カッコ内は引用された詩句)。

 奏に、主題と四つの変奏が続く。強く 鋭いピッツィカートの第1変奏で始ま り、第4変奏では高音域をかけめぐる。 第2楽章 "眼差し"(眼から、あなたの 緑の眼から流れ出る毒/私の魂が震え / 逆さまの姿を映す湖水) 常に高音 域で独奏チェロが旋法的な旋律を静か に歌う。"謎"の序奏の再現で終結する。 第3楽章 "うねり"(黒檀の海よ、お前 にはまばゆい夢がある/帆布と船乗り と長旗とマストの) 第1楽章 "謎"の 主題に由来する旋律が、エネルギッシュに波打つように展開される。

第4楽章 "鏡"(私たち二人の心臓は大きな焔となり/向かい合った鏡のなかに/私たちの心臓の二倍の光を反射させよう) 官能的で神秘的な音楽。ハープの和音が反復し、その響きが管弦楽に映され、独奏チェロが静かに歌う。第5楽章 "賛歌"(あなたたちの夢を大事にしなさい/賢者の夢は狂者ほど美しくないのだから) ここまでの各楽章の主題が再帰するなか、だんだんと"謎"の主題が支配的になる。最後の独奏チェロの反復の回数は奏者に任されている。

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン3、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、シンバル、クロテイル、トライアングル、シロフォン、マリンバ、グロッケンシュピール、ボンゴ、トムトム、ゴング、銅鑼)、ハープ、チェレスタ、弦五部、独奏チェロ

ブルックナー

交響曲 第3番 =短調〈ワーグナー〉(第3稿)

作曲: 1872~73年(第1稿)、1877年(第2稿)、1888~89年(第3稿)/ 初演: 1877年12月16日、ウィーン/演奏時間: 約57分

アントン・ブルックナー(1824~ 96)の交響曲第3番は、彼の全作品の 中で異稿が最も多い問題作である。第 1稿となる交響曲は、1873年の大晦日 に完成した。その年の秋、ブルックナ ーは、第2番と作曲中の第3番の二つ の交響曲を携えて、作品について助言 をもらおうとバイロイトのワーグナー のもとを訪れた。当時、祝祭劇場の建 設で頭がいっぱいだったワーグナー は、最初は乗り気でなかったものの、 楽譜に目を通すと第3番の冒頭のトラ ンペットに興味をもったようで、ブル ックナーが献呈を申し出ると、快諾の 返事がもらえた。そして完成後、専門 の筆写譜家によって清書された総譜 が、1874年5月9日付でワーグナーに 献呈された。ブルックナーは、表紙の 図案を作る際、ワーグナーの名前は豪 華に、自分の名前は控え目にと注文し たという。そこにも謙虚な作曲家の人 柄が表れているといえよう。

いわばワーグナーのお墨付きをもらったような作品だが、1874年と翌年に、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団にパート譜を準備して提出したものの、2回とも演奏を拒否された。そのためこの第1稿が、作曲家の生前に

初演されることも楽譜が出版されることもなかった。ブルックナーは大半の交響曲で書き直しや改訂を重ねているが、第3番も、1877年に大幅な短縮と楽想やオーケストレーションの変更を行い、第2稿が完成した。9月にウィーン・フィルから3回目の演奏拒否があったものの、同年末のウィーンの楽友協会の演奏会での初演が決まった。

その喜びも束の間、彼の良き理解者だった指揮者へルベックが急逝し、ブルックナー自身がタクトを取ることになってしまった。指揮者としてのブルックナーの未熟さもあり、明らかに練習不足で本番を迎えた。長い演奏会の最後に演奏されたこともあり、初演は音楽評論家ハンスリックを中心とした反対派の野次にさらされた。その惨憺たる結果に、ブルックナーは相当落ち込んだが、幸いなことに出版社から楽譜出版の打診があり、翌年に総譜とパート譜が出版された。

その後、数々の作品の成功でウィーンにおけるブルックナーの名声は確立され、第3番の再演が待たれるようになった。マーラーは反対したようだが、周囲に押されて再改訂を行い、1889年に第3稿が完成した。

本日は、第3稿による演奏である。 第1稿にはワーグナーの作品からの引用を思わせるフレーズ(〈トリスタンとイゾルデ〉の「愛と死のモティーフ」や〈ワルキューレ〉〈タンホイザー〉からなど)も含まれた。多くは改訂を重ねるなかで削除されたものの、ときおりワーグナーの音楽を思わせるフレーズも入ってくる。また、いわゆるブルックナー・リズム(2+3、3+2)がこの交響曲から本格的に登場し、改訂を重ねるなかでそれが強調されるようになった。

楽曲全体としては、第1稿から第2稿の改訂で小節数が減少し、すっきりと整理され、さらに第3稿では第2稿で追加されたスケルツォ楽章のコーダが外され、終楽章の再現部が大幅に削除された。

第1楽章 より遅く、神秘的に。ニ短調、2/2拍子 弦楽器の弱音の響きから、ワーグナーに強い印象を残したトランペット独奏の第1主題が現れる。ブルックナー休止(総休止)をはさみ大きく高まる。ブルックナー・リズムが用いられる第2主題は、弦楽器の内声も美しい。管楽器の力強い第3主題の途中で、トランペットによってコラール風の旋律が浮かぶ。三つの主題が展開し、再現部ではブルックナ

ー・リズムがいっそう強調される。

第2楽章 アダージョ:動きをもって、クワジ・アンダンテ。変ホ長調、4/4 拍子 改訂のたびに速度標語が微妙に変化し、楽章規模も縮小された。穏やかな第1主題がヴァイオリンで歌われ、しばらくすると3/4拍子となり、ヴィオラが美しく憧れに満ちた第2主題を奏でる。静かで神秘的な楽想をはさみ、第2主題がヴァイオリンの細やかな動きとともに現れる。そして全弦楽器のピッツィカートにのせて第1主題が木管で再現され、力強いファンファーレが輝き、祈りのような音楽で終結する。

第3楽章 スケルツォ:かなり速く、 ニ短調、3/4拍子 弦楽器の旋回する 音型とピッツィカートが組み合わされ、最強音へと向かう。中間部トリオ (イ長調)では素朴な旋律が歌われる。 第4楽章 フィナーレ:アレグロ、ニ 短調、2/2拍子 力強く突き進む第1 主題、愛らしく表情豊かな第2主題、 強弱を対比させ、管楽器が高らかに響 く第3主題が提示される。再現部は第 3稿では第1主題と第3主題が削除されたため、縮小された第2主題から始まる。最後は第1楽章の第1主題が金 管で輝かしく再現されて明るく結ばれる。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

20

マーラー

交響曲 第5番 嬰ハ短調

作曲:1901~02年/初演:1904年10月18日、ケルン/演奏時間:約68分

6.30 [末] 6.29[水]

道下京子(みちした きょうこ)・音楽評論家

リスト

ピアノ協奏曲 第2番 (長調

作曲:1839~61年/初演:1857年1月7日、ワイマール/演奏時間:約21分

フランツ・リスト (1811~86) は、 ハンガリー王国ライディング(現オー ストリア領)生まれ。10歳でウィーン、 その翌年にはパリへ移り住む。国際的 なピアニストとして名声を博したの ち、1848年にワイマールの宮廷楽長 に就任し、61年まで活動した。ピア ノ協奏曲第2番はこの時期の作品であ る。1839年に初稿を書き上げたのち、 57年までに何度も改訂を施し、長い 推敲を経て61年に完成をみた。1857 年の初演時には、リスト自ら指揮台に 立ち、彼の弟子のブロンザルトがピア ノ独奏を務めている。

リストはピアノ協奏曲第1番を作曲 した際、それまでの協奏曲の典型であ った3楽章ではなく、4楽章構成をと った。それは、イギリスの作曲家リト ルフ (1818~91) が作曲した四つの楽 章からなるピアノ協奏曲に影響を受け たため、と考えられている。それに対

しピアノ協奏曲第2番は、テンポが目 まぐるしく変化し、はっきりとした楽 章の区分がない。区分については六つ の部分、あるいはそれ以上、また三つ の部分などさまざまな解釈が存在し、 リトルフに影響を受けた第1番と同じ ように四つに区切ることもできる。作 品は単一楽章で、自由なソナタ形式で 書かれている。

リスト自身はこの作品を「交響的協 奏曲 | と呼んでいたという。第1番で はヴィルトゥオーゾ的な側面が顕著で あったが、第2番では自由奔放な表現 が特色で、冒頭の主題の変容によっ て、交響詩を思わせるドラマティック な作品となっている。曲の冒頭の木管 楽器がなだらかに畝を描くように下行 する楽想が主要主題である。自作のピ アノ・ソナタロ短調と同じように、主 題のさまざまな変形や変容によって、 音楽を自由に展開させてゆく。

楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボー ン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (シンバル)、弦五部、独奏ピアノ

グスタフ・マーラー (1860~1911) は、ボヘミア生まれ。1875年にウィ ーンへ赴き、ウィーン楽友協会音楽院 で学んだ。同時に、彼はウィーン大学 哲学科にも在籍し、ショーペンハウア ーやニーチェらの世界に触れてゆく。 この大学ではブルックナーの講義も受 け、深い信頼関係を築いた。

1879年に音楽院を卒業したマーラ ーは、各地の劇場で指揮者として活 動。1888年には、ブダペスト王立歌 劇場の正指揮者のポストを得た。のち にウィーン宮廷歌劇場やウィーン・フ ィルの指揮者も務めた。

1901年4月、マーラーはウィーン・フ ィルを辞任、ただしウィーン宮廷歌劇 場での仕事は継続した。その年の夏、 彼は〈亡き子をしのぶ歌〉と〈リュッケ ルトの詩による5つの歌曲〉のなかの 数曲を作曲し、交響曲第5番のスケッ チも手掛けるなど、創作に専念する。 しかし新しいシーズンが始まると、彼 は指揮者としての活動に忙殺された。 彼がこの交響曲の創作を再開するのは 1902年であり、その年の夏にマイアー ニックの山荘で曲を完成させた。

この創作期間、マーラーはプライヴ エートでも大きな変化を迎える。1901

年11月、22歳のアルマ・シントラー とめぐり合う。アルマは作曲家を目指 してツェムリンスキーのもとで学ん だ。マーラーとアルマは出会って4か 月後の、翌年3月9日に結婚。さらに その年の11月には長女マリア・アン ナを授かる。

交響曲第5番は、声楽を含む第2番 から第4番とは一線を画しているが、 歌曲との関連はこの作品でも強い。な かでも象徴的なのは、第1楽章の葬送 行進曲。ここでは自作の〈亡き子をし のぶ歌〉との関連が見られるものの、 誰を弔ったものなのかははっきりとし ていない。彼の交響曲には、他にも第 1番や第2番に葬送行進曲が置かれて いる。

なお、作品は5楽章構成であるが、 第1部 (第1楽章&第2楽章) と第2部 (第3楽章)、そして第3部(第4楽章& 第5楽章) に区切られている。

第1楽章 葬送行進曲:ゆったりと した歩みで、厳格に。葬列のように 嬰ハ短調。冒頭のトランペットの調べ は、あまりにも衝撃的である。ここで 用いられるリズム動機は、ベートーヴ エンの交響曲第5番〈運命〉第1楽章の、 いわゆる「運命の動機」を連想させる

(同時に、メンデルスゾーン 〈結婚行進曲〉のリズム動機でもある)。続いて、弦楽器群がいくぶんテンポを落ち着かせてメランコリックな主要主題を奏でる。この楽章は、小ロンド形式的な構成で、変ロ短調の激しい楽想が最初のクプレ (中間部)。主要主題が回帰したのち、〈亡き子をしのぶ歌〉の第1曲「いま、太陽はかくまでも晴れやかに昇ろうとする」のモティーフが現れる。

第2楽章 嵐のように激しい動きをもって。きわめて激烈に イ短調。短い序奏ののち、ヴァイオリンが荒々しく主要主題を提示する。ソナタ形式に基づいており、嵐が静まったのち、へ短調に転じて第2主題をチェロが奏でる。この楽章には、第1楽章の素材も用いられているが、終盤の二長調のコラールも印象的だ。金管楽器が鳴り響く輝かしいコラールの旋律は、第5楽章にも現れる。

第3楽章 スケルツォ:力強く、速すぎず ニ長調。揺れ動くような軽やかな楽想で、ホルンに導かれて木管楽器が第1主題を表す。変ロ長調へと変わり、落ち着いた雰囲気のなかでヴァイオリンが第2主題を奏でる。この主題はオーストリアの古い舞曲、レントラーの趣を湛えている。この楽章もソナ

タ形式を 礎 としており、続いてホルン によって息の長い三つ目の主題を提示。 曲中には、冒頭のホルンによる象徴的 なモティーフがちりばめられている。 第4楽章 アダージェット:非常に遅 く へ長調。〈亡き子をしのぶ歌〉の第 2曲「なぜそんなくらい眼差しで」など、 自作との関連が指摘されている。ハー プを含めた弦楽器で演奏される。冒頭 では〈リュッケルトの詩による5つの 歌曲〉の第3曲「私はこの世に忘れら れしを連想させる音楽が浮かび上がる。 綿々と続く甘美な音楽は、和声の解決 を引き延ばすことによって醸し出され る。この楽章は、「アダージェット」 の名で単独で演奏されることもある。 第5楽章 ロンド-フィナーレ:アレ グロ ニ長調。序奏の牧歌的な調べを ホルン、ファゴットそしてオーボエが 紡ぎ上げる。ファゴットの駆け上がる ようなモティーフは、自作〈子どもの 魔法の角笛〉の「高い知性への替美」か ら採られた。序奏ののち、第1主題を ホルンが穏やかに歌い上げてゆく。こ の楽章では、フーガのような書法が用 いられており、活発に動きまわるチェ ロによる第2主題にもフーガが見られ る。第2楽章に現れた金管楽器による コラールは、コーダで高らかに響きわ たり、フィナーレの終結に華を添える。

楽器編成/フルート4 (ピッコロ持替)、オーボエ3 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット3 (エスクラリネット、バスクラリネット持替)、ファゴット3 (コントラファゴット持替)、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、グロッケンシュピール、ムチ、銅鑼)、ハープ、弦五部